

(9) 造船会社経営者のオーラルヒストリー

語り手：稲益敏幸（稲益造船株式会社社長）

1937年8月23日生

聞き手：田上繁、若宮幸一

聞き取り日：2012年8月10日

場 所：稲益造船(株)（若松区今光）

洞海湾の変容と造船業

田上： こちらの方の造船業てのは、稲益さんのときに立ち上げられた、それとも先代？

稲益： わたしの親父がね、大正14年に久留米出身なんです。久留米から小倉の親戚を頼って、こちらに出て来て、藤ノ木新栈橋で便利大工、造船所でなくて、わたしも唐戸町で生まれたんです。「大工さんちょっと来て、うちの船修理してくれや」、当時はシャリキ、シャリキね、リヤカーに道具を積んで材料積んで、藤ノ木新栈橋まで仕事に行った。わたしも唐戸町で生まれた。

田上： そうですか。

稲益： で、ここに親父がレールを敷いたのが昭和10年ですね。私が生まれる以前にここにレールを敷いたときは、みな洞海湾は木造ばかりだった。主にハシケ、うん。当時はね、筑豊の方からどんどん石炭を積み出して来て、新栈橋から運び出していた訳ですよ。石炭を積み込むための機帆船がひしめいていた。

田上： はい。船と鉄道で。

若宮： 鉄道ですね。

稲益： もう電車で石炭を運び出して来てね。で、藤ノ木新栈橋から上（かみ）の方に、木造船ですよ。運び出して来よった。いわゆる「花

と龍」の時代ですね。

田上： わたしも高校までこちらで育ったので、そこら辺のことは少しは知ってるんですけど。

稲益： ああ。それが石炭がまったくなくなって、今度は八幡製鉄、鉄の町、大型本船が入って来るわね。うん、八幡製鉄の製品どんどん積み出しよった。鉄の町に変わったんよ。石炭の町、洞海湾から洞海湾は鉄の町に変わった。ところが、若戸大橋ができて、本船が入らなくなった。なんと八幡製鉄の溶鉱炉が、今はジェットコースターになった。若戸大橋からわたし洞海湾を見下ろして見た。がらん、がらんですよ。船の姿が見えん。で、当然ね、われわれ船の病院、船のお医者さんも数が減った。

田上： そうですよ。

稲益： 船がいてこそ洞海湾だ。がらん、がらん。長崎の方とかね。みんなあちこちからやって来よった。貨物船、昔は木造船ですね。機帆船、小型鋼船、これも荷物がなくなって、みな陸上、トラック、高速道路。みんなやめて、残るのは数えるだけで。で、今申しますね、わたしは親父の手伝い入って、わずか60年のあいだに洞海湾のわれわれ同業、同業現れては消え、社名と経営者変わるんですよ。26軒、26軒目がね、北湊でやつ

ていたニッスイマリン工業、日本水産の系列。

若宮： 元若松造船。

稲益： ニッスイマリン工業の前身が若松造船。若松造船の前身がくきの海造船。そういうふう
に社名と経営者変わる。26 軒、今残るはわ
ずか 3 社ですよ。うちと日本造船と東洋造
船。で、今わが社の仕事仲間、従業員がち
ょうど 50 名、50 名。ほとんどがその中の 1
人、2 人が「何とかつこうてもらえんでしょ
うか。苦しい思いしたくない。お宅で一生懸
命頑張りますけ、頑張りますけ」という人た
ちの集団。違いますね、根性が。[]、そ
して、最後来てくれたのが、ニッスイマリン
工業から来てくれた営業の村上と、造機の岩
熊氏。それが最後の造船所だったんです。
ちやうどうちの親父がね、旗揚げしたころ
が、洞海湾の華でした。

造船業の経営

田上： ハシケはやはり 40 年代まで造られてたん
ですか。

稲益： そうですね。

田上： そいで、最初は木造ですよ。それから鋼
船ですか。

稲益： うちはね、新造ていうよりも修理が主体で
すね。

田上： 修理が主体。

稲益： 新造主体の造船所というのは、修理の少な
い、近所にね、船の少ない造船所が全国から
注文を受けて、新しい船を。ところが、若松
の造船所は、新造船を造る暇ていうか、余裕
がない、修理で。

田上： 新造船を造っている会社もありました、若
松に？

稲益： いや。当時から少なかったですね。修理が
主体。当時は新造するところは四国の方とか
ね、鹿児島、熊本の方とか。やはり、その近
くに船が少ないところとか、遠くから注文に

来るんですよ。

田上： あっ、四国とか。

稲益： 鹿児島、熊本とか。

田上： 鹿児島。

稲益： 熊本あたりは新造船が主体です。ていうの
も、全国から注文が。

若宮： 例えば、その材木が豊富にあったとか、材
料が手に入りやすかったとか。

稲益： そうですね。それもありましたね。

若宮： もちろん場所と海とですね。四国でしたら
今治とかあっちの方ですか。

稲益： そうですね。尾道とか。

造船の技術と修理

稲益： だけど、親父たちの時代は、木造船、大工
さん、船大工さんが主体ですよ。それか
ら、その上架をした船底のところにまきはだ
を詰める。

田上： まきはだとは。

若宮： 木と木の間のすき間を水漏れしないように
すき間に詰め込む。

田上： じゃ、社長さんはお父さんからいろいろ技
術を習われて。

稲益： そうですね。だけど、わたしは親父の手伝
い始めて、そのなんていうかなあ、親父がわ
たしに任してくれるころには、木造からこん
だ鋼船にだんだん代わりつつありましたね。

田上： それは昭和でいうと、何年ぐらいでしょう
か。

稲益： 昭和何年ですかね、35 年ぐらいから 40 年
ぐらいにかけてですね。鋼船に代わりまし
たね。

田上： 鋼船にねえ。じゃ、その木造の船大工さん
のような方は、またそこから鋼船の技術を？

稲益： そうですね。

田上： そうですか。社長さんもまたそういう形で
鋼船の方の修業を？

稲益： そうですね。

田上： そうですか。木造の場合のときの船大工さんていうのは、やっぱり若松の方が多いですか、職人さんは。

稲益： そうですね。若松の方々が一番多いし、それから、壱岐とか対馬とかね。あっちの方からも結構来られてね。

田上： じゃ、その木造が最盛期のときには、何人もの大工さんを、船大工さんを抱えられていたんですか。

稲益： わたしが、親父のとき始めたころは、はい、5人しかいなかった。

田上： それから、一番多いときは何人ですか。

稲益： 今50名くらい。

田上： ハシケの場合には、修理はやはり船会社から依頼されお仕事が来る？

稲益： いえ。

田上： 個人から来る。

稲益： 一隻、船主船長ですね、船主船長。自分が船乗ってね、運航して。

田上： ええ。例えば、第一港運さんてご存じですかね。一昨日お話聞いたんですけど。自分とこでも1万トンぐらい持ってたと。それで個人所有の方も、大体半々ぐらいを自分のところで抱えていたちゅんですけど。そうすると、第一港運さんの船ですと、やはり会社から依頼が来るという、そういうシステムではないんですか。

若宮： そういうこともある。

田上： そういうこともある。それと、個人的なハシケの所有者からやはり来る？

稲益： はい。

田上： やはり大体半々ぐらいですか。

稲益： 半々ぐらい。

田上： 修理ていうと、どういうところが一番傷むんですか。素人が全然分からないので、こういう質問を。

稲益： 定期的にそのドック。

若宮： 船底とか。

稲益： 船底掃除して、ペンキ塗ってですね。

田上： なるほど。

稲益： カキがいっぱい付くと、虫が付くとですよ。ね。

田上： なるほど。どこか壊れたから修理するということもあるんでしょうが、そういうメンテナンスですか。

稲益： 定期的にね。定期的にドックをしとかなないと、はい、寿命がないんですね。定期的にドック。

田上： 大体1年に1度ぐらいは？

稲益： そうですね。大体1年に1度ぐらいね。

ハシケの構造

田上： ハシケでは大きさが、木造船でも大体おなじような大きさですか。

稲益： はあ、大体おなじような大きさですね。

田上： おなじような大きさですか。それはもうある程度図面があれば、おなじような形、形もほとんど変わらない？

稲益： そうですね。おなじような形ですね。今でいう、トン数でいえば100トンぐらいですかね、100トンぐらい。

若宮： 積みトン数で200トン？

稲益： いえ、いえ。積みトン数で100トンですね。

田上： 100トンぐらいですか。石炭100トンぐらい積んで、それで前の方にあれがある？

若宮： 前の方に居住区がある。

田上： 居住区があるんですね。石炭のあれはなんというんですか。そこ積むところ、ドウノマとかいう人もいますけど。

稲益： ドウノマていうのは、荷物を積むところ。

田上： 荷物を積むところ。なにか特別なそういう名称とか、船の。

稲益： ダンブルとか荷の間とか。

田上： 居住区、居住区は居住区ていうんですか。

稲益：　そうですね。船員室とかね。居住区。

田上：　で、その上に、あの居住区ちゅうのは、そういうところの横のところにある？

若宮：　前にある。

田上：　前の方にあるんですね。

若宮：　オモテ側にある。

田上：　それに上に出たところになにか、あれはなんですか。食事とかするところですか。

若宮：　とか、炊事場を造ったり、水場を造ったり、水桶を置いたりですね。

稲益：　水桶を置いたり。建物の中にすべて収まっていますけね、はい。その船の前側か後側どっちかにですね。

田上：　それはタイプが2つあるんですか、前と後ろていう。

稲益：　その前もある、後ろもあるという船はいますよ。どちらかですよ。

田上：　居住区のことですか。じゃない。居住区、後ろの場合もあるんですか。前もある。で、その上に出たところにそういう台所とか、それでなにか荷物を入れたりするちゅうところもありますか。

稲益：　ええ、部屋の下の方にですね。船底の方ですね。

田上：　で、トイレもちょっと囲った、あれはいつも、どこも後ろですか。

稲益：　そうですね、トモの方。

田上：　トモの方？

稲益：　前の方にある船もありますけど。大体後側。前の方はその船引っ張って行くでしょう。そうすると、部屋があるとね、前が見にくいし、邪魔になるから。大体船は後ろの方に部屋が、建物が多いですよ。

砂船組合

稲益：　戸畑のね、砂船、砂船の船主船長、戸畑のね、砂船組合作ったのが、はい、当時の砂船の船主連中、凄かったですよ。当時、ちょう

ど港湾土木の忙しいころですよ、戸畑の砂船組合ができてね。広島の似島からみなやって来た人ばかり。

若宮：　似島。

稲益：　これが木造船の砂船でね。芦屋の川口に突っ込んで行って、足場を組んで、担いで砂を積みよった。

田上：　砂船ていうのは、砂を運ぶための船ですか。

稲益：　砂を採って。

若宮：　採集して。

稲益：　芦屋のね、芦屋の川口で砂を採集して、それをあちこち運ぶ。全部足場を組んで、人の手で、人の肩で担いで砂を陸上に揚げてた。それが鋼船になって、ガット船いうて。

若宮：　クレーンで。

稲益：　クレーンでバケツで運ぶ。それ以前は全部木造船で担いで砂を積みよった。で、その戸畑のね、組合作って、砂船が15隻ぐらいおったかな。岸壁にずらーっと、その人たちが全部広島の似島から出て来た人ばかり。で、戸畑の砂採取組合を作って。それがなんとね、鋼船になって。ところが、現在ね、現在もう港湾土木辺りに砂の利用がなくなって、全部トラック輸送になって、船が必要ない。全部やめたり、廃船したり、戸畑の砂船も少なくなった。

若宮：　いませんねえ。

稲益：　全然おらん。

若宮：　若戸大橋の下から渡船場のところから、ずーっと着いてましたよね。日水の第二工場のところまで、凄かったですよね。それが、木船からこんだ小型鋼船に代わってですね。

稲益：　そう、そう。ガット船に代わってね。

田上：　これ何年ごろですか。広島の似島出身者が来てやってたというのは。昭和30年ごろ？

稲益：　うん。昭和30年ごろ。一番栄えたのがそのころですね。

田上：　最盛期が。その船ていうのも、似島から来

る訳ですか。それとも、船はこちらの方で。

稲益： 似島から出て来た人たちが、こちらで事業、商売始めてね、居ついてしもた。で、組合も作った。

田上： 戸畑の方に。

稲益： だから、初代の人たちが似島から来て、2代目はこちらで生まれた人ばかり。大体2代ぐらいでもうやめましたね。2代目でやめた。